

# 蔵書印からみた藩校の機能について

## — 松江藩修道館文庫印譜ならびに史料目録の作成を通して —

梶谷 光弘

### はじめに

図書に捺された印を蔵書印と解釈すると、使用されたその種類には、

- ① 普通の認印のような印
- ② 書画の落款として捺す印
- ③ 自分の好きな詩句熟語を刻した印 (=遊印)
- ④ 初めから蔵書に捺すために作った印

がある。そして、それが捺された時は、

- ア. 自らが所蔵した時
- イ. 自家の蔵書を手放す時
- ウ. 本の売買の仲介した時や、書肆から借りたり、書肆が見本で置いていった時
- エ. 書中の題跋識語の下に証明した時
- オ. 校合が終了した時

があり、内容には、

- a. 個人の姓名や名のみ、また寺社の名を刻したもの
- b. 官名や役職名を刻したもの
- c. 所蔵者の小像を刻したもの
- d. 蔵書を受け入れた際に由来を刻したもの
- e. 板本の別を刻したもの
- f. 購入や調査の年月を刻したもの
- g. 借閲の注意を刻したもの
- h. 所有者の死後の蔵書の処分を指示したもの
- i. 取り扱い書肆の名を刻したもの
- j. 刊行者および修補者を刻したもの
- k. 商標として刻したもの<sup>(1)</sup>
- l. 分類項目を刻したもの<sup>(2)</sup>
- m. 地名や住所や勤務地を刻したもの
- n. 夫婦の姓名や名を刻したもの<sup>(3)</sup>

などがある。

また押印位置には、巻首、巻末、冊首、冊尾、首葉、末葉、表紙、目録首尾、凡例の首、題簽、内部などがあり<sup>(4)</sup>、完全な印もあれば割印もある。

こうして、蔵書印の種類(①~④)、押印時期(ア~オ)、内容(a~n)、押印位置、さらには所蔵本と借用本の別を考えると、その組み合わせは10,000通りを越え、非常に多岐に分かれる。しかも、後世の偽印や後人が勝手に捺したものや入札に付したものなどがあり、どれだけが蔵書のために作られ

たものであるか断言できない<sup>(5)</sup>。

したがって、蔵書印の定義に図書専用の意を明言することは、実際上では非常に難しい<sup>(6)</sup>。

ところが、松江藩関係の書籍に捺された印をみると、個人の姓名や遊印(前述の種類①③④・内容a)、学校や部局の名(種類④・内容b)、蔵書の由来を示すもの(種類④・内容d)、取り扱いの注意(種類④・内容g)、取り扱い書肆の名(種類④・内容i)などで、いずれも蔵書に捺すことを使用目的の一つにしていたと考えられる。

### 1. 蔵書印研究の目的

蔵書印は早くから蔵書目録作成の過程で指摘されていたが<sup>(7)</sup>、書誌学研究がとかく静的な印象が強いためか、その研究は昌平坂学問所の書籍に捺された蔵書印をもとに日中交流史を明らかにした大庭脩氏の『江戸時代における唐船持渡書の研究』(昭和42年)や『江戸時代における中国文化受容の研究』(1984年)が注目されるほどで、いたって少ない。この蔵書印を研究することによって、官庁諸機関の旧蔵書の内容や各機関の性質が判断できたり、蔵書の源流や幕府や各藩が行った政策の背景などを知ることができる。一方、個人印の場合には、その蔵書が今日までにどんな学者の手を経、どの研究者に愛されてきたか、また作家の取材範囲を知ることができる<sup>(8)</sup>。

本稿では、松江藩修道館が所蔵したと思われる書籍を「松江藩修道館文庫」と仮称し、その蔵書印別目録を作成する。現在はまだその作業過程にあるが、この基礎的作業をもとに、蔵書印が成立した修道館こそ私塾から学校への明確な転換であり、松江藩が学制改革をしながら、総合大学や行政庁としての機能を整えていった時期であったことを論じてみたい。そして、教育史研究が書誌学などを積極的に取り入れ、儒学、国学、医学、軍事、算術などを含めて総合的に研究されるべきであることを提案したい。

### 2. 松江藩修道館文庫蔵書印

松江藩の学事は、宝暦7(1757)年、6代藩主松平宗衍が処士桃源蔵を儒官として招き、翌年城下母衣町に文明館を創建したことに始まる。天明4(1784)

年、7代藩主治郷はそれを明教館と改称し、書籍の充実に努めるとともに、文化年間には越後流兵法を講義する大享館を設け、軍学にも力を注いだ。そして、8代藩主斉貴の西洋好みに関係して文久2(1862)年に西洋学校が設置され、翌3(1863)年には、それまで各々の師範家で教えられていた射術、馬術、槍術、刀術、柔術の教場が藩士の修業に不便だったため、練兵操練を習兵所とし、残りを統合して文武館とした。慶応元(1865)年には修道館と改称し、明治5(1872)年4月30日まで続いた<sup>9)</sup>。同年6月、その教授であった桃文之助、内村友輔ら34名は「輩及幼童ノ徒徒ラニ貴重ノ光陰ヲ曠過スルヲ痛概」<sup>10)</sup>し、旧修道館を借り、祭神をそのまま神床として<sup>11)</sup>松江義塾を開き、「教則ノ順序」<sup>12)</sup>に従って、皇学、漢学、英・仏学、習書、算術を教えた。その34名の教官を見ると、英仏学担当は皇漢学担当と同数の15名であり<sup>9)</sup>、洋学へ力を入れていたことが明らかである。しかし、同年8月に学制発布を受けた時、松江義塾は「文部省ノ教則ニ牴牾」<sup>14)</sup>したため、翌9月4日に閉鎖してしまった。

一方、医学は文化3(1806)年に山本逸記を招いて漢医学校存濟館を設け、和漢医書本草および針灸などを教授したことに始まり、明治3(1870)年正月まで存続した。西洋医学の研究は、慶応3(1867)年に修道館洋学校内に西洋医学世話役田代郷平が就任して原書による教授を始め、明治2(1869)年には仮病院と医学所、翌3(1870)年には藩立病院と医学教授所を経て、同年11月には規模を拡大して医学校とし、病院を併設した。医学校では理化学、解剖学、生理学、病理学、薬剤学、内外科、眼科婦人科から2つ以上の科目を選び、文法書、蘭書といった原書や訳書を用いて学んでいた。

慶応元(1865)年7月から12月にかけて、儒官の桃文之助、砲術の和多田淵蔵、軍学の渡部善一の3名は熊本藩時習館を訪ねて学事を視察した。また、明治3(1870)年4月から翌年7月までは静岡藩からフランス人ワレットとアレキサンドルを招き、医学・語学・兵学などを教授させたりして、修道館の改革を進めていった。

こうして、松江藩修道館は閉校までに国典428部、漢書209部、史子百家書411部、訳書632部、英書1028部、仏書821部、蘭書87部、合計3616部の蔵書を所蔵した<sup>15)</sup>。その後、これらの書籍はいったん「本県官庫」<sup>16)</sup>へ納められ、明治6(1873)年10月<sup>17)</sup>から文部省書籍館、京都集書会社に次いで開設した「縦覧所」(通称松江書籍縦覧所)へ移された。明治10(1877)年当時、そこでは和書980部、洋書2871部、合計3851部<sup>18)</sup>を所蔵し、4年間で増えたのはわず

か235部、全体の6%ほどであった。

しかし、「縦覧所」が閉鎖した明治11(1878)年後の蔵書の移動についてははっきりしない<sup>19)</sup>。

さて、これまでにわかっている島根県および出身者の蔵書印は、雲藩図書<sup>20)</sup>、津和野文庫<sup>21)</sup>、浜田侯之府之図書<sup>22)</sup>、松江藩9代藩主松平定安公<sup>23)</sup>、本居宣長門人の千家俊信(清主、梅舎)<sup>24)</sup>、津和野藩出身で明治政府に仕えた福羽美静(硯堂)<sup>25)</sup>、同じく幕末から明治初期にかけて国学者として名を馳せた大国(野々口)隆正<sup>26)</sup>、同じく軍医かつ小説家であった森鷗外<sup>27)</sup>、浜田藩校教授であった小篠敏<sup>28)</sup>、演劇史家で『出雲国人物誌』の著者であった伊原青々園<sup>29)</sup>、漢学者で『史記会註考証』を著した滝川亀太郎(君山)<sup>30)</sup>、大正期に経済評論家として活躍した小汀利得<sup>31)</sup>、日本法制史の権威であった三浦周行<sup>32)</sup>、松江市の名誉市民である小泉八雲<sup>33)</sup>などである。

拙者は以前「松江市内図書館の蔵書印について」と題して、島根大学附属図書館、島根県立図書館、日本赤十字病院附属図書館の各館所蔵書籍に捺されている蔵書印を紹介した<sup>34)</sup>。これまでにこれらの図書館や明治6(1873)年内に開校した第18・19・20中学区内の63の小学<sup>35)</sup>の学校沿革史を所蔵する松江市・安来市・出雲市・平田市・八束郡・能義郡・飯石郡・簸川郡の小学校とその地域にある公民館を調査した。

その結果、県内に存在する蔵書印のうち、明治20年頃までに使用されたと思われるものは、次の通りである。

#### (1) 学校・部局

##### ①松江藩

雲藩図書、雲州蔵書、修道館蔵、軍用方、御軍用方(2種)、軍務図書、軍務局、軍用局、松江藩公用局、算術方鶴書印、松江医籍之記、医学校、雲州洋学館之印章、松江藩公用局<sup>36)</sup>

##### ②支藩広瀬藩

広瀬藩教倫館図書記、広藩図書<sup>37)</sup>

##### ③津和野藩

津和野文庫、養老館蔵書之印<sup>38)</sup>

##### ④浜田藩

浜田侯之府之図書

##### ⑤旧制中学校

松江中学、島根県尋常中学校印、島根県第一中学校印、島根県第一中学校図書之印、島根県第一尋常中学校図書之印、島根県立松江中学校図書之印、尋常中学校印、島根県立尋常中学校印、島根県第一中学校、松江中学校郷土室印、島根県浜田中学校印、島根県立第一中学校図書印、島根県出雲国神門郡浜村公立神門中学校<sup>39)</sup>

⑥師範学校

浜田師範学校之印、島根県浜田師範学校印<sup>(40)</sup>

⑦医学校および病院関係

松江公立病院図書記、島根県松江病院之印、島根県医学校之印章、島根県松江医院之章、松江病院<sup>(41)</sup>

⑧その他

文友館蔵<sup>(42)</sup>

(2) 書肆

①松江藩

ハルトリー大坂十六番、外国本屋薬種屋道具屋  
横浜本町通八十四番ハルトリー並ニ江戸大坂商  
売仕候、江戸本町徳右エ門町二丁目萬屋兵四郎、  
MISSION MILITAIRE DE FRANCE AU  
JAPON. 舶来蕃書類官阪原書類同翻訳書類東  
都江左老皂館発兌

②松江藩外

今市遠藤屋、今市上遠藤屋、皇漢洋書翻訳書類  
松江天神街川岡清輔、書籍新聞島根県管下園山  
喜三右エ門第六区本町、島根県松江本町書籍新  
聞園山喜三右エ門文合堂、大原屋大津町、雲州  
松江小豆屋中原<sup>(43)</sup>

(3) 個人

①松江藩

桃氏永宝（松江藩儒桃家）、養正塾記、雨森謙  
三郎献納、彰嘉斎响蔵、精翁（以上4点は松江  
藩儒雨森謙三郎）、篤斐之印、鱸香（2種）、内  
内村篤斐（4種）、倉山、友輔、内村氏家蔵記、  
子輔氏（2種）、鱸香□□書、鱸香書屋蔵、内  
内村篤斐、倉山堂蔵書記、倉山堂（以上12点は  
松江藩儒内村友輔）、澤野図書（教導所教授澤  
野修輔）、岡本瑞庵（松江医官岡本瑞庵）、高木  
氏蔵書印（松江藩儒高木文四郎）、FIC VA  
LETTE. YOKOHAMA. JAPON（松江藩お  
雇い外国人ワレット）、栗原蔵書、栗原氏蔵書  
記（以上2点は松江医官栗原一貫）、松鳥軒、  
龍、吉岡主□、茄子形印、□斎、燕山之印、吉  
岡思之、碩□、松鳥庵、有貞之印、藤岡主、藤  
岡性主（以上12点は松江藩御徒吉岡専蔵・藤岡  
有貞親子）、原田（松江藩士原田作助）、久保田  
印、久保田蔵書（以上2点は松江藩修道館数学  
助教久保田愛之丞）、可部家蔵（津和野藩可部  
家）、藤山□民印（松江藩医藤山□民）、海氏蔵  
書、松江中原海氏蔵書、海氏（以上3点は広瀬・  
母里藩儒官海野家）、山村氏蔵書（広瀬藩儒山  
村勉斎）、田代家蔵（医学一等助教田代嚮平）、  
雲州今市錦□、種、大橋蔵書、河東蔵書印、井  
川武図書印、間瀬蔵書、石原氏印、徳□、栗斎

主□、芸□之記、藤之蔵書、芸塾蔵書、芸□之  
府、明州蔵書、□川蔵書、金本氏之蔵書、岡田  
□印、宇多川之蔵書、金本、伊藤氏蔵書印、山  
田蔵書、林氏蔵書、芸雲、広善、山根永宝<sup>(44)</sup>

②松江藩外

KOMOLI.（医者小森桃塙）、谷干城玩書（土  
佐藩出身農商務大臣谷干城）、小宮山氏収蔵図  
書（水戸藩実務官小宮山楓軒）、善菴図書（儒  
者朝川善庵）、浅草文庫（紀伊藩侍医板坂卜斎）、  
播州東木治加東<sup>(45)</sup>

③不明

嵯峨支涼渡邊家印、水野蔵書、弘毅斎図書記、  
石崎□□、益齋馬場氏蔵書記、静斎蔵記、錦海  
東□村上所蔵、齋堂文庫章、□斎図書<sup>(46)</sup>

(4) 遊印

信而好古、憂□□□聊以永日、学到古人難、陶冶  
□□篇尊陽求本<sup>(47)</sup>

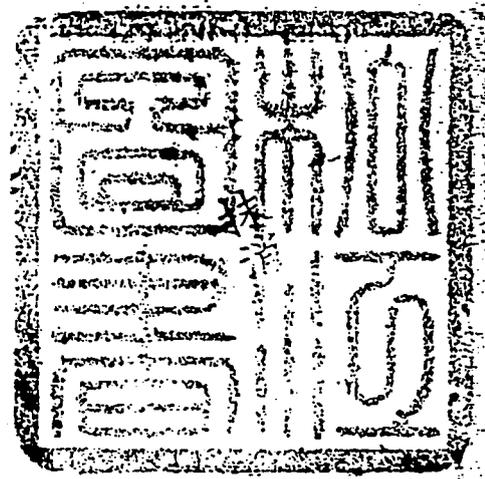
(5) その他

らくがきまたがし御無用、松江図書（朱白文）、  
長崎東道官許、島根県、島根県私立教育会事務所  
証、松江図書館、<sup>(48)</sup> 小学（校）印多数、未解読印  
多数

今回は、このうちの(1)学校・部局の①松江藩の印  
譜とその目録を整理する。

3. 藩校・部局印譜（注。「□」は写本を表す。）

(1) 松江図書



(朱)

(Nouveau Dictionnaire de la Langue Francaise  
より採取)

【島根県立図書館】

1 G. P. Quackenbos, *A Natural Philosophy*,  
New York, 1870年. [17冊中の1冊]

- 2 A. Spiers and Gabriel Surene, *The Standard Pronouncing Dictionary of the French and English Languages*. New York, 1870.
- 3 M. Noël et M. Chapsal, *Nouveau Dictionnaire de la Langue Francaise*. Paris, 1866~68. [6冊中の2冊]
- 4 加藤雷洲『仏語箋』。
- 5 『蘭和辞書』。
- 6 J. D. Calten, *Leid Draad Bij Het Onderrigt in de Zee-artillerie*. Medemblik, 1842.
- 7 小山陶三『改正増補補蛮語箋』嘉永元年。

【日赤附属図書館所蔵】

- 8 川本幸民『気海観瀾広義』安政3年。
- 9 ストローメル、佐藤尚中訳『外科医法』慶応元年。
- 10 フイセンイユス『試薬用法』大坂理学校、明治3年。

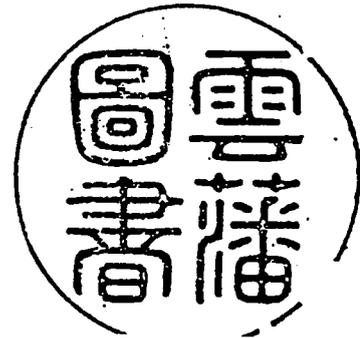
【島根大学附属図書館】

- 11 秋田十七郎義一編『算法地方大成』。
- 12 『外務省蔵版日本澳地利条約書』。
- 13 豊潤谷応編著『明鑑紀事本末』。
- 14 『吾学編』。
- 15 『西河合集』。
- 16 伊藤長胤『盍簪録』。
- 17 楽平詹陵良卿『異端弁正』。
- 18 長門井鶴汀先生撰『古訓輯要』。
- 19 『御製周易折中』。
- 20 因幡河田孝成『周易新疏』。
- 21 『毛詩正義』。
- 22 『五行丈義』。
- 23 『儀礼章句』。
- 24 呉□氏解宋宋氏補音、尾張秦士鉉先生著『春秋国語定本』嘉永7年刊。
- 25 『四書集註』。
- 26 『正統疑孟』宝暦2年刊。
- 27 筑陽後學員原篤信輯『近思録備考』。
- 28 『学的』丘□輯。
- 29 明張和仲選『千百年眼』明和4年刊。
- 30 蘇格蘭弗拉撒□多拉著、佐倉藩西村鼎重器訳、『西史年表』明治4年刊。
- 31 水府史臣青山延干『皇朝史略』。
- 32 『慎終疏節』。
- 33 音博士岩垣先生編『国史略』。
- 34 『統日本紀』。
- 35 水藩□田筑山輯『近世外史』。
- 36 「烈祖成績」。
- 37 『弘簡録』。

- 38 『漢書評林』。
- 39 『綱鑑易知録』。
- 40 『後漢書』。
- 41 『会試録』。
- 42 青山拙斎『明徴録』文化6年自序。
- 43 『尚友録』。
- 44 『禁中方名目鈔』。
- 45 『大日本籌海全図』。
- 46 『華夷通商考』。
- 47 『標注職原抄校本』。
- 48 「制度通」。
- 49 横井時存『文武一途之説』。
- 50 剣持要七章行著『算法開蘊』嘉永2年。
- 51 関氏孝和先生遺編『括要算法』正徳2年。
- 52 長谷川善左衛門閔『算法点竄手引書』天保12年。
- 53 岩井湛々先生閔『算法円理氷積』。
- 54 南塘先生校訂『天工開物』明和8年。
- 55 青山量介子世甫著『統皇朝史略』天保2年。
- 56 奥村基之輔閔『割円表』安政4年。「明和四年辛未四月松本文平献納全部三部之内数学所」と墨書きあり。
- 57 勢陽逸□田好之訳『斎民要術』延享元年。
- 58 『茶経詳説』。
- 59 毛利貞斎『会玉篇大全』嘉永7年刊。
- 60 『古今韻会举要小補』。
- 61 『広金石韻府』。
- 62 『韻府古篆彙選』。
- 63 『修辞指南』。

(小計 63部)

(2) 雲藩図書



(朱)

(*Nieuw Woordenboek der Nederduitsche en Engelsche Taal* より採取)

【島根県立図書館】

- 1 伊藤長胤『名物六帖』正徳4年序、安永6年。
- 2 G. P. Quackeenbos, *A Natural Philosophy*

- .New York, 1870. [17冊中の1冊]
- 3 桂川甫周『和蘭字彙』安政2年。
- 4 *Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst Maatscch Appij*.Edo,1857.
- 5 F. Halma, *Le Grand Dictionnaire Francois Halma*.Hage,Leiden, 1781年。「KOMOLI.」朱丸印あり。
- 6 M. Noël Chomel, *Algemeen Huishoudelijk-, Natuur-, Zedekundig en Konst-Woordenboek*. Leyden, Leeuwarde, 1768~77.
- 7 M. Noël Chomel, *Vervolg op M.Noel Chomel Algemeen Huishoudelyk-,Natuur-,Zedekundig en Konst Woor Denboek*.Amsteldam, 1786.
- 8 Egbert Buys, *Nieuw en Volkomen Woordenboek*. Amsteldam, 1772.
- 9 D. Bomhoff, *Nieuw Woordenboek der Nederduitsche en Engelsche Taal*. Nijmegen, 1851.
- 10 Jean Holtrop, *Dictionnaire Portatif, Francois et Hollandois, de Mr. Pierre Marin*.1773.
- 11 H. Picard, *A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages*.
- 12 Par Smith, *Nouveau Dictionnaire Francais-Anglais et Anglais-Francais*. Paris, London, 1859.
- 13 P. Weiland, *Nederduitsch Taalkundig Woordenboek*. Amsteldam, 1799~1811. [「雲州洋学館之印章」が切り取られている]
- 14 P. Weiland en G. Landre, *Nieuw Handwoordenboek der Nederlandsche en Fransche Talen Fransch-Nederlandsch*. Leyden.
- 15 A. Jaeger, *A New Pocket-Dictionary of the English and Dutch and Dutch and English Languages*.Gouda.
- 16 P. Weiland, *Nederduitsche Spraakkunst*. Dordrecht, 1829.
- 17 H. E.Lloyd, *Nieuwe Engelsche Sprakkunst*. Arnhem, 1855.
- 18 Thomas Carpenter, *The Scholar's Spelling Assistant*, London, 1862.
- 19 G. A. Van Kerkwijk, *Handleiding tot de Kennis van den Vestingbouw*.Breda, 1846.
- 20 *Atlas van xl Platen, Behoorende Bij de Handleiding tot de Kennis van den Vestingbouw*.Breda, 1846.[VALETTOのサインと黒丸印573]
- 21 J. M. Engelberts, *Proeve Eener Verhandeling. Over de Kustverdediging*.Gravenhage, 1839.
- 22 L. F. Geeling en J. J. H. Urbain, *Blik op de Militaire Zamenstelling en Sterkte. Der Oonderscheidene Staten van Europ en Andere Werelddeelen*.Arnhem,1830.
- 23 G. Von Scharnhorst, *Militair Zakboek tot Gebruik in het Veld, Naar het Hoogduitsch*. Amsterdam, 1828.
- 24 A. W. De Bruyn, *Militair Zakboekje ten Dienste van het Hederl Andsche Leger; Doch Meer Bijzonder van het Wapen der Artillerie*. Gravenhage, 1839.
- 25 C. Von Decker, *Taktiek der Drie Wapens: Infanterie, Kavalerie en Artillerie*. Gravenhage, Amsterdam, 1831.
- 26 Koninklijke Akademie voor de Zee-en Landmagt, *Reglement op de Exercitien en Manoewres der Infanterie*.Breda, 1856~57.
- 27 *Reglement op de Exercitien en Manoewres van de Infanter Ij*.Gravenhage,Amsterdam. [アレキサンドルのサインあり]
- 28『英吉利文範二編全』文久元年。
- 29 Mitcell, *Mitcell's School Atlas*.Philadelphia, 1860.
- 30 E. H. Brouwer, *Geschiedenis der Oorlogen in Europa. Sedert het Jaar, 1792;Breda,1842~54*. [ワレットの黒丸印411,341,84,サインあり]
- 31 F. G. Wentе, *Werktuigkundig Handboek, Bevattende Praktische Regels en Tafels, Toepasselijk op land-, Boot-en Locomotiefstoomwerktuigen*. Amsterdam, 1852.
- 32 F. P. Gisius Nanning, *Beginzelen der Versterkingskunst; Vrij Gevolgd Naar het Fransch van N.S-avart*. Amsterdam,1827.
- 33 J. Kramers, Jz, *Geographisch-statistisch-historisch Handboek of Beschrijving van het Wetenswaardigste uit de Natuur en Geschiedenis*. Gouda, 1850.
- 【島根大学附属図書館】
- 34明威大將軍『練兵実紀』弘化元年。
- 35佐藤信淵『兵法一家言』天保4年。
- 36村井昌弘『図解量地指南』宝暦4年跋、享保18年。
- 37加藤之直『兵要録補闕』元禄5年序。
- 38木村宗三訳『兵法鈞論』。
- 39佐藤信淵「水戦法秘訣」嘉永2年。
- 40『官板中外口誌』『雨森謙三郎献納』印あり。
- 41下曾禰桂園『鈴林必携』嘉永5年。
- 42『海上砲具全圖全』安政元年。
- 43市川斎宮訳『遠西武器図略』嘉永6年。

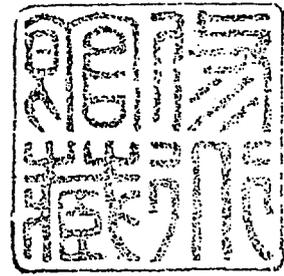
- 44 小林小太郎『築城約説』慶応3年刊。  
 45 青山幸哉『西洋度量』安政2年。  
 46 カルテン著、宇田川榕庵等訳『海上砲術全書』安政元年。  
 47 『官板玉石志林』。  
 48 長沼広敬『校刻兵要録』。  
 49 「金湯要録」。  
 50 「強盛術原」。  
 51 「埵氏」。  
 52 「提綱」。  
 53 「遠西兵鑑」。  
 54 陸軍所『英国斯氏築城典列』慶応元年。  
 55 「金杭術」。  
 56 牧穆仲訳「騎兵操練」。  
 57 「習騎啓蒙」。  
 58 慕維廉序『英国志』1856年。  
 59 箕作省吾『坤輿図識』弘化2年。  
 60 箕作省吾『坤輿図識補』弘化3年。  
 61 楓江釣人『海外新話』嘉永2年。  
 62 防風茅元儀編『武備志』。  
 63 西村茂樹「海防新編」。  
 64 『西洋制度記』。  
 65 洋書調所訳『官板海外新聞壬戌二月・九月刻』文久2年。  
 66 豊潤谷応編著『明鑑紀事本末』。  
 67 カラメル著、小関高彦訳、大槻磐溪補『新訳合衆国小誌』安政2年。  
 68 『英吉利国条約並税則全』官板。  
 69 『亜墨利加国条約並税則全』官板、安政6年。  
 70 『仏蘭西国条約並税則全』官板、安政6年。  
 71 『阿蘭陀国条約並税則全』官板、安政5年調印。  
 72 『魯西亜国条約並税則全』官板、安政6年。

【日赤附属図書館】

- 73 J. Kramers Jz, *Algemeene Kunstwoordentolk.* 1863.  
 74 『和蘭字彙』AB、CD、HIJK、LMNO、PQR、UVWXYZ  
 75 Dr. D. W. H. Busch, *Atlas van Verloskundige Afbeeldingen.* Amsteldam, 1844.  
 76 Thomas Templeman van der Hoeven, *Verhandeling over Percussie en Auscultatie.* Amsteldam, 1849.  
 77 *Schei Kunde*; 出島, 1859. ポンペの自筆 (写本)。  
 78 *Ooghee* □ *Unde*; 1861. ポンペの自筆 (写本)。  
 79 *Physionogie*; ポンペの自筆 (写本)。  
 80 *Algliek Tek* □; ポンペの自筆 (写本)。

(小計 80部)

(3) 修道館蔵



(朱)

(『大日本史列伝賛藪卷之三』より採取)

【島根大学附属図書館】

- 1 安藤 □ 『文章軌範纂評』安政5年。  
 2 『福恵全書』。  
 3 『評苑改正文選傍訓大全』。  
 4 三宅観潤『皇朝政要中興鑑言』。  
 5 藤原芳樹撰『標注職原抄校本』。少助教預りの墨書きあり。  
 6 近藤芳樹『大統歌』嘉永7年序、安政6年刊。「鈴木助教預り」「森山少助教預り」と墨書きあり。  
 7 谷川士清『日本書記通証』延享5年。  
 8 『唐宋名家史論奇鈔』。  
 9 朝長吉行『東鑑』。  
 10 川本幸民訂正『相馬略上』慶応3年。  
 11 福沢諭吉『西洋事情』慶応2年。  
 12 福沢諭吉『西洋事情外篇』慶応3年。  
 13 福沢諭吉『増補和解西洋事情』慶応4年。  
 14 福沢諭吉『西洋事情次編』慶応4年。  
 15 会沢正志斎『下学邇言』弘化4年。  
 16 清原夏野等『令義解』天長10年。  
 17 蒲生秀実(君平)『職官志』。  
 18 北畠親房『職原鈔上』。「内田少助教預り」と墨書き。  
 19 速水房常校訂『職原鈔校訂』。上巻に「鈴木少助教預り」、下巻に「黒沢少助教預り」と墨書きあり。  
 20 橋爪貫一校正『地方大成』官許、明治2年。  
 21 『亜墨利加国条約並税則全』官板、安政6年。  
 22 『英吉利国条約並税則全』官板。  
 23 『阿蘭陀国条約並税則全』官板、安政5年調印。  
 24 『仏蘭西国条約並税則全』官板、安政6年。  
 25 『魯西亜国条約並税則全』官板、安政6年。  
 26 『鹿園先生漢書』。  
 27 後藤芝山編、山本正臣補『増補元明史略』享和3年序。

- 28『増訂史記評林』明治2年。  
 29『十八史略』元治4年。  
 30頼山陽『大日本史列伝贊藪』明治2年。  
 31山県禎編『国史纂論』天保10年。  
 32『神代正語』。「中野預り」と墨書き。  
 33『儀式』天保5年。  
 34『内裏式』享和3年。  
 35対馬洲後学藤斎延編『古語拾遺句解』元禄11年刊。  
 36会沢正志斎『新論』。  
 37『皇典文彙』。「鈴木少助教預り」と墨書き。  
 38吉田松陰『講孟筭記』明治2年。

【島根県立図書館】

- 39箕作氏版『和蘭文典後編』安政4年。前後編とも割印。いずれも「医局」と墨書き。前編には修道館蔵印なし。  
 40 David A. Wells, *A. M. Wells's Principles and Applications of Chemistry for the Use of Academies, High-schools, and Colleges*. New York, 1868.  
 41 J. Pelouze et E. Fremy, *Abrégé de Chimie*. Paris.  
 42 B. Boutet de Monvel, *Notions de Chimie*. Paris, 1866.  
 43 M. Amédée Burat, *Géologie Appliquée ou Traité de la Recherche et de l'exploitation des Minéraux Utiles*. Paris, 1846.  
 44 MGR Daniel, *Abrégé Chronologique de l'histoire Universelle*. Paris, 1865.  
 45 Marcius Willson, *Primary American History for Primary Schools*. New York, 1867.  
 46 Maltebrun, *Abrégé de Géographie Universelle*. Paris. [Yocinoske Wada のサインと「種」黒丸印あり]  
 47 Vattel, *Le Droit des Gens ou Principes de la Loi Naturelle*. Paris, 1863.  
 48 Joseph Garnier, *Traité d'économie Politique Sociale ou Industrielle*. Paris, 1868.  
 49 William and Robert Chambers, *Arithmetic Theoretical and Practical*. London.  
 50 G. P. Quackenbos, *A Natural Philosophy*. New York, 1870. [17冊中の6冊にあり]  
 51 Peter Parley, *Universal History on the Basis of Geography*. New York, 1869~70. [9冊中の2冊]  
 52 J. L. Jewett, *Ollendorff's New Method of Learning to Read, Write, and Speak the French Language*. New York, 1867.

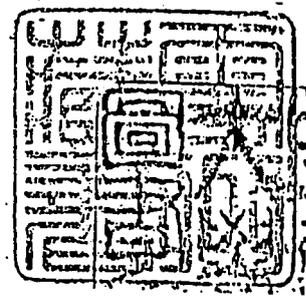
- 53 Jewett, *A Key to the Exercises in Ollendorff's New Method of Learning to Read, Write, and Speak the French Language*. New York, 1866.  
 54 William A. Wheeler, *A Dictionary of the English Language Explanatory, Pronouncing, Etymological, and Synonymous, with a Copious Appendix*. Philadelphia, 1870.  
 55 M. Noël et M. Chapsal, *Nouveau Dictionnaire de la Langue Francaise*. Paris, 1866~68. [6冊中の4冊]  
 56 J. Pelouze et E. Fremy, *Abregde Chimie*.  
 57 *Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst Maatsch Appij*. Edo, 1857.

【日赤附属図書館】

- 58箕作氏版『和蘭文典後編成句論』安政4年。  
 59箕作氏版『和蘭文典前編』安政4年。  
 60 F. W. Sargent, M. D., *Minor Surgery*. Philadelphia, 1867.  
 61 Thos. H. Huxley and W. M. Jay Youmans, *Physiology and Hygiene*. New York, 1870.  
 62 Robley Dunglison, M. D., *A Dictionary of Medical Science*. Philadelphia, 1868.  
 63 John Mayne, M. D., *A Dispensatory and Therapeutical Remembrancer*. Philadelphia, 1848.

(小計 63部)

(4) 雲州蔵書



(朱)

(「制度通」より採取)

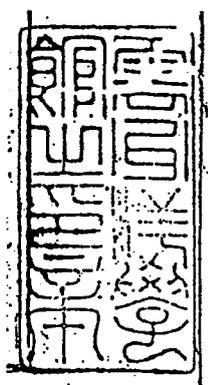
【島根大学附属図書館】

- 1 伊藤長胤輯「制度通」。

(小計 1部)

## (5) 雲州洋学館之印章

(小計 12部)



(黒)

(*Geologie Appliquée ou Traité de la Recherche et de l'exploitation des Minéraux Utiles* より採取)

## 【島根県立図書館】

- 1 箕作氏版『和蘭文典』安政4年。割印と「医局」の墨書きあり。
- 2 M. Fossé, *Verklaarde Vragen over de Veldverschansing, den Vestingbouw en den Aanval en Verdediging van Vestingen, Voor Jonge Officieren*.1833. [間宮観一、布野雲平於江戸洋学指南被申付候]の墨書きあり。
- 3 M. Amedee Burat, *Géologie Appliquée ou Traité de la Recherche et de l'exploitation des Minéraux Utiles*.Paris, 1846.
- 4 B. Boutet de Monvel, *Notions de Chimie*. Paris, 1866.
- 5 J. Pelouze et E. Fremy, *Abrégé de Chimie*. Paris.
- 6 J. L. Jewett, *Ollendorff's New Method of Learning to Read, Write, and Speak the French Language*.New York, 1867.
- 7 Jewett, *A Key to the Exercises in Ollendorff's New Method of Learning to Read, Write, and Speak the French Language*.New York, 1866.
- 8 蘭道氏訳、桂川甫周等校『和蘭字彙』安政2年。
- 9 *Abgrdechimie J.Pelouze et E.Fremy*.
- 10 *Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst Maatsch Appij*.Edo, 1857.
- 11 H.E.Lloyd,*Nieuwe Engelsche Spraakkunst. Arnhem, 1855*. [蔵書印の部分は切り取られている]

## 【日赤附属図書館所蔵】

- 12『和蘭文典後編』。

## (6) 御軍用方



(黒)

(「諳厄利亞人性情志序」より採取)

## 【島根県立図書館】

- 1 林羅山『豊臣秀吉譜』寛永19年自序、明暦4年刊。
- 2 林羅山『織田信長譜』寛永18年自序、宝永18年刊。
- 3 林羅山『京都將軍家譜』寛永18年自序、明暦4年刊。
- 4 岡田正利編「徳川歴代」。
- 5 寺島良安編「武徳安民記」宝永5年。
- 6 大槻茂質問、杉田勤撰「増訂采覧異言」享和2～文化元年。
- 7 鹿角山房蔵版『字彙子集』。
- 8 木村高敦『記附録卷十五～十九』宝永5年。

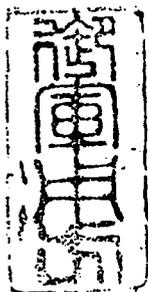
## 【島根大学附属図書館】

- 9『泰平基軍伝後篇』。
- 10『泰平基軍伝前篇』。
- 11木村礼斎「北辺紀聞」。
- 12「雑集」。
- 13鶴飼信之『明清闘記』寛文元年。
- 14『鴉片本末論評』。
- 15大田錦城「職方外紀」。
- 16高坂昌信著、春日惣次郎書繼『甲陽軍艦』。
- 17大槻茂質問、津太夫等答、志村弘強記「環海異聞」文化4年。
- 18青生元宣『国郡全圖』文政11年序。
- 19「亜細亞列風土記」。
- 20「亜弗利加列風土記」。
- 21吉雄宜訳「諳厄利亞人性情志」。
- 22佐藤信淵「水陸戦法録」嘉永元年。
- 23ゼーアルテルレリー翻訳「則亜爾底兒列里」。
- 24本木正栄翻訳『海岸備要』嘉永5年。

- 25村井昌弘『図解単騎要略』。
- 26村井昌弘『単騎要略製作弁』。
- 27香川正矩著、同宣阿補『陰徳太平記』元禄8序、正徳2年刊。
- 28『関西陰徳太平記』。

(小計 28部)

(7) 御軍用方



(朱)

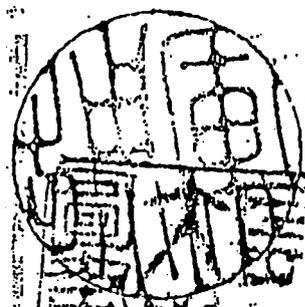
(『本朝通紀前編卷之十六』より採取)

【島根大学附属図書館】

- 1 『本朝通紀』。
- 2 『通俗三国志』。
- 3 『通俗通鑑五代軍談』。

(小計 3部)

(8) 軍用方



(黒)

(「武徳編年集成」より採取)

【島根大学附属図書館】

- 1 福沢諭吉『西洋事情次編』慶応4年。
- 2 木村高敦「武徳編年集成」元文5序。
- 3 『前前太平記』。

(小計 3部)

(9) 軍務図書



(朱)

(Instruction du 17 Avril 1862 sur l'exercice et les Manceuvres de l'infanterie より採取)

【島根県立図書館】

- 1 林羅山『豊臣秀吉譜』寛永19年自序、明暦4年刊。
- 2 林羅山『織田信長譜』寛永18年自序、宝永18年刊。
- 3 林羅山『京都將軍家譜』寛永18年自序、明暦4年刊。
- 4 岡田正利編「徳川歴代」。
- 5 木村高敦「武徳編年集成」元文5序。
- 6 木村高敦「武徳安民記」宝永5年。
- 7 新井白石編「藩翰譜」元禄15年、享保元年刊。
- 8 大槻茂質撰、杉田勤撰「増訂采覧異言」享和2～文化元年。
- 9 M.Noël et M.Chapsal, *Nouveau Dictionnaire de la Langue Francaise*. Paris, 1866~68.  
[6冊中の1冊、FIC VALETTE JAPON YOKOHAMAの黒丸印もあり]
- 10 加藤雷洲『仏語箋』。
- 11 小山陶三『改正増補補蛮語箋』嘉永元年。
- 12 J.D.Calten, *Leid Draad Bij het Onderrigt in de Zee-artillerie*. Medemblik, 1842.
- 13 E. Sommer, *Grammaire des Ecoles Primaires*. Paris, 1869.
- 14 *Cours Complet d'études a l'usage des Ecoles Régimentaires du Deuxieme Degré Infanterie et Cavalerie Pour Repondre*. Paris, 1863. [丸黒印 MIS-SION MILITAIRE DE FRANCE AU JAPONあり]
- 15 *Extrait du Décret du 13 Octobre 1863 Portant Règlement sur le Service Dans les Places de Guerre et les Villes de Garnison*. Paris, Strasbourg, 1864.

- 16 Au Ministère de la Guerre, *Instruction du 17 Avril 1862 sur l'exercice et les Manœuvres de l'infanterie*. Paris, 1862.
- 17 *Ordonnance du Roi du 22 Juillet 1845 sur l'exercice et les Manœuvres des Bataillons de Chasseurs à Pied*. Paris, 1856.
- 18 *Exercice et Manœuvres des Bataillons de Chasseurs à Pied*. Paris, 1863.
- 19 *Règlement Provisoire sur les Manœuvres de l'artillerie*. Paris, 1849.
- 20 M. Garrigues, *Simple Lectures sur les Sciences les Arts et l'industrie*. Paris, 1869. [丸黒印「FIC VALETTE, YOKOHAMA, JAPON」、ワレットのサインあり]
- 21 F. P. Gistius Nanning, *Beginnselen der Versterkingskunst, Vrij Gevolgd Naar het Fransch van N. Savart*. Amsterdam, 1836~37.
- 22 P. Régimbeau, *Nouvelle Méthode Simplifiant l'enseignement de la Lecture*. Paris, 1869.
- 23 『記附録』木村高敦、宝永5年。
- 24 *Aide-Memoire a l'usage des Officiers d'artillerie*. Paris, Strasbourg, 1861.
- 【島根大学附属図書館】
- 25 万年頼方、二階堂行憲『難波戦記』寛文12年。
- 26 雲庵『北越軍記』寛永20年自序。
- 27 成島司直編『参河後風土記』天保8年。
- 28 近松門左衛門『本朝三國志』享保5・6年。
- 29 橋爪貫一『度量考摘要全』明治4年。
- 30 上野常足編『度尺篇全』。
- 31 兵学寮『土工程式』明治3年。
- 32 陸軍所『馬寮新篇』慶応2年。
- 33 大鳥圭介『砲科新論』文久元年。
- 34 陸軍兵学寮『游泳小学』明治4年。
- 35 江戸福地氏蔵版『那破倫兵法』慶応3年。
- 36 明威大將軍、藤川憲校『練兵実紀』弘化元年。
- 37 大槻磐溪、瀨脇節蔵訳述『野戦兵囊前編』1863年。
- 38 講武所『武教全書』万延元年。
- 39 渡部一郎訳、柳河春三訳『陸軍士官必携』慶応3年。
- 40 兵学寮『砲術小学』明治3年。
- 41 『砲台新式完』『西洋流銃陣概略』『行軍図解』『煩碼学校』合冊。
- 42 鈴木強訳『兵学小学』弘化3年。
- 43 細川十洲校、芳川春寿訳『一千八百七十年李仏戦記』明治4年。
- 44 ヒュキュエニン『烙丸術実験訳説全』。
- 45 山鹿素水『練兵実備』嘉永3年。
- 46 長谷川忠雄『兵要録補闕』元禄5年序。
- 47 佐藤信淵『兵法一家言』天保4年。
- 48 長崎一鶚『通俗南北朝梁武帝軍談』宝永2年。
- 49 福沢諭吉、小幡篤次郎、小幡甚三郎合訳『洋兵明鑑』明治2年。
- 50 中村昂然作、林九成校『通俗唐太宗軍談』元禄4年序、宝永2年刊。
- 51 曾田勇次郎訳『慕氏兵論』文久3年。
- 52 山鹿高祐（素行）『武家事紀』延宝元年。
- 53 勝水川閔、奥平隆橋訳『東軍要録』1863年。
- 54 本木正栄訳『砲術備要』文化5年。
- 55 木村宗三訳『兵法鈞論』。
- 56 佐藤信淵『水戦法秘訣』嘉永2年。
- 57 土生熊五郎『□不恤□』。
- 58 『孫子全図説』。
- 59 『書経考異』。
- 60 『陸稼書先生四書講義遺編』。
- 61 『呂晚村孟子講義』。
- 62 『官板中外新報』。「雨森謙三郎献納」印あり。
- 63 『官板中外□誌』文久2年。「雨森謙三郎献納」印あり。
- 64 下曾禰桂園『鈴林必携』嘉永5年。
- 65 桂川甫周訳述『魯西亞志』寛政5年。
- 66 『南亞墨利加』。
- 67 山鹿高祐『武事記』。
- 68 箕作阮甫『八紘通誌』嘉永4年。
- 69 『襪爾襪里亞風土記』。
- 70 『中興武家盛衰記』明和3年。
- 71 岡田伊三次郎『魯西亞雜録』。
- 72 岡島冠山（玉成）訳『通俗元明軍談』宝永2年。
- 73 長崎一鶚『通俗北魏南梁軍談』宝永2年。
- 74 香川正矩著、同宣阿補『陰德太平記』元禄8序、正徳2年刊。
- 75 『関西陰徳太平記』。
- 76 湖南文山『通俗三國志』元禄2自序。
- 77 夢梅軒章峯『通俗唐玄宗軍談』元禄4自跋、宝永2年刊。
- 78 毛利貞斎『通俗通鑑五代軍談』宝永2年。
- 79 ゼーアルテルレリー翻訳『則亞爾底兒列里』。
- 80 『海上砲具全図全』安政元年。
- 81 『瀛環志略』。
- 82 本木正栄翻訳『海岸備要』嘉永5年。
- 83 市川斎宮訳『遠西武器図略』嘉永6年。
- 84 ヤマーコップウエルレム「火攻精撰図式全」1829年。
- 85 小林小太郎『築城約説』慶応3年刊。
- 86 青山幸哉『西洋度量』安政2年。

- 87「秤量編全」。  
 88村井昌弘『図解単騎要略』。  
 89村井昌弘『単騎要略製作弁』。  
 90宇田川榛斎『和蘭内景醫範提綱』。  
 91本木良永、木村元綱訳「象限儀用法」天明3年。  
 92カルテン著、宇田川榕庵等訳『海上砲術全書』安政元年。  
 93陸軍兵学寮『山砲操法全』明治4年。  
 94『官板玉石志林』。  
 95積水陣人『臥榻兵話』文久2年。  
 96兵学寮『金湯中學』明治3年。  
 97ウ・ア・ファン・レース『攻守略説』慶応3年。  
 98『校刻兵要録』長沼広敬。  
 99「金湯要録」。  
 100「強盛術原」。  
 101佐藤信淵「水陸戦法録」嘉永元年。  
 102山口繁蔵訳『英国戦略』。  
 103「埵氏」。  
 104陸軍所『勤方規則』慶応3年。  
 105兵学寮『造厩法』明治3年。  
 106兵学寮『造榮法』明治3年。  
 107「提綱」。  
 108「遠西兵鑑」。  
 109ハーレーン、宇式直訳『戦地必要』1861年再版、慶応3年刊。  
 110最上徳内著、本多利明訳「蝦夷国風俗人情之沙汰」寛政2年。  
 111吉雄宜訳「諳厄利亞人性情志」。  
 112防風茅儀編『武備志』。  
 113西村茂樹「海防新編」。  
 114青山拙斎『明徴録』文化6年自序。  
 115高坂昌信著、春日惣次郎書継『甲陽軍艦』。  
 116大田錦城「職方外紀」。  
 117大槻茂質問、津太夫等答、志村弘強記「環海異聞」文化4年。  
 118青生元宣『国郡全図』文政11年序。  
 119「亜細亜列風土記」。  
 120カラメール著、小関高彦訳、大槻磐溪補『新譯合衆国小誌』安政2年。  
 121「亜弗利加列風土記」。  
 122福沢諭吉『西洋事情次編』。  
 123『西洋制度記』。  
 124小幡甚三郎訳『英国軍艦刑法』明治2年。  
 125物茂卿『孫子国字解』。  
 126鷓鴣飼信之『明清闘記』寛文元年。  
 127『鴉片本末論評』。  
 128夢梅軒章峯、称好軒徽庵『通俗漢楚軍談』元禄3年。

- 129木村礼斎「北辺紀聞」。  
 130「雑集完」。  
 131長井定宗編『本朝通紀』。  
 132『三楠実録』。  
 133『北条九代記』延宝3年。  
 134『泰平基軍伝後篇』。  
 135洋書調所訳『官板海外新聞壬戌二月・九月刻』文久2年。  
 136ウーイコイプ『兵法略説』1853年。  
 137高島秋帆『歩操新式』元治元年。  
 138『泰平基軍伝前篇』。  
 139福沢諭吉『西洋旅案内』。  
 140ユヒキューニン著、手塚謙蔵訳「西洋鍔煩鑄造篇」。  
 141『遠西武器図略』。  
 142川本幸民訂正『相馬略下』。  
 143『前前太平記』。

(小計 143部)

(10) 軍務局



(黒)

(『攻守略説一上』より採取)

【島根県立図書館】

- 1 小山陶三『改正増補蛮語箋』嘉永元年。  
 2 加藤雷洲『仏語箋』。

【島根大学附属図書館】

- 3 ウ・ア・ファン・レース『攻守略説』慶応2年。  
 4 山口繁蔵訳『英国戦略』。  
 5 陸軍所『勤方規則』慶応3年。  
 6 ハーレーン、宇式直訳『戦地必要』1861年再版。  
 7 小林小太郎『築城約説』慶応3年。

(小計 7部)

(11) 軍用局



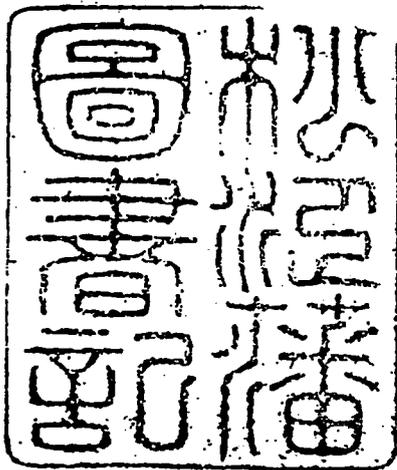
(黒)

(『三楠実録上之八』より採取)

【島根大学附属図書館】

- 1 『三楠実録』。
- 2 『北条九代記』。
- 3 夢梅軒章峯、称好軒徽庵『通俗漢楚軍談』元禄3年。

(12) 松江藩図書記



(朱)

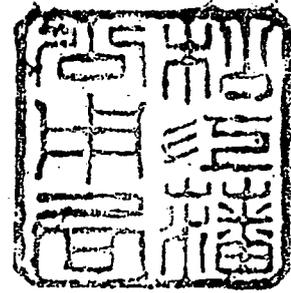
(A Complete Epitome of Practical Navigation  
より採取)

【島根県立図書館】

- 1 J.W.Norie, A Complete Epitome of Practical Navigation. London, 1868, 1869.

(小計 1部)

(13) 松江藩公用局



(朱)

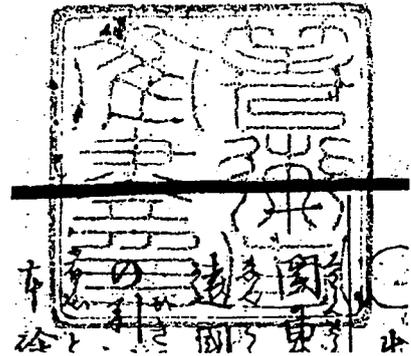
(『献替録卷二』より採取)

【島根大学附属図書館】

- 1 『世界国尽』。
- 2 『策論全』。
- 3 頼山陽『新策正本』安政2年。
- 4 瓜生三寅『交通起源』。
- 5 『外務省蔵板日本澳地利条約書全』。
- 6 後学萩原裕録評『献替録』。
- 7 清原夏野等『令義解』元長10年。

(小計 7部)

(14) 算術局鶴書印



(朱)

(『算法地方大成卷之三』より採取)

【久保田孝氏蔵】

- 1 「差分十有七問数学所」。
- 2 「税務下数学所」。

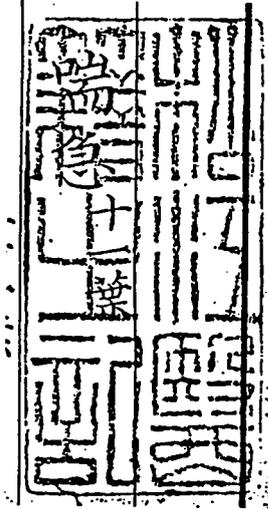
【島根大学附属図書館】

- 3 秋田十七郎義一編『算法地方大成』。
- 4 平内大隅延臣撰『算法真術正解』天保11年刊。
- 5 剣持要七章行著『算法開蘊』嘉永2年。
- 6 関氏孝和先生遺編『括要算法』正徳2年。
- 7 関孝和編「求積」。

- 8 西播長谷川先生閱『算法点竄手引草』。  
 9 岩井重遠閱『算法円理冰积』。  
 10 奥村基之輔吉当閱『割円表』。

(小計 10部)

(15) 松江医籍之記



(朱)

(「活人事証方」より採取)

【日赤病院附属図書館】

- 1 橋本伯寿『断毒論』文化6年。  
 2 守国、定国、寧国、安国『新刻医林状之济世全書』。「文政八年六月初五日献上栗原一貫茂樹」と墨書き。  
 3 大清江南古瀛处士周南岐来著、皇和山陰松江門人城章陽秋校『其慎集』享保21年。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。  
 4 彰常叔順甫著「温泉論」文化13年。「栗原氏蔵書記」、「文政七年八月廿九日栗原一貫源茂樹献上」と墨書きあり。  
 5 小野蘭山鑒定、孫職孝編『本草啓蒙名疏』。  
 6 山脇尚徳著『養寿院医則』宝暦元年跋。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。  
 7 曲直瀬道三『啓迪集』慶安2年刊。「文政七年八月廿九日栗原一貫源茂樹献上」と墨書き。  
 8 杉田玄白訳、中川淳庵校『解体新書』安永3年。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。  
 9 宇田川榛斎訳『西説医範提綱积義』文化2年刊。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。  
 10 加古角洲『吐方撮要』文政5年。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。  
 11 竹田快翁撰、竹田雷井補『延寿類要』。「文政七年八月廿九日栗原一貫源茂樹献上」と墨書き。  
 12 小野蘭山、職孝編『本草啓蒙名疏』。  
 13 『寿世保之』丙・丁集。  
 14 『太草衍義』。  
 15 『聖濟総録』。  
 16 『黄帝内経素問註発微』。  
 17 『重訂唐王寿先生外台秘要方』。  
 18 『難病証治類方』。  
 19 『仁斎直指方』。  
 20 『二神伝』。  
 21 深江輔仁著『本草和名』丹波元簡序、寛政8年。  
 22 『瘍科証治準繩』。  
 23 『観聚方要補』。  
 24 『王翰林集註黄帝八十一難経』。  
 25 「醫方考繩愆」元禄10年。但し岡本瑞庵、田代文祥の名前があるものには印なし。  
 26 丹波元簡、櫟窓書「活人事証方」享和2年。  
 27 張仲景『金匱要略直解』。  
 28 長岡厚宗宅撰『牛南先生松蔭医談』寛政10年序。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」の墨書き。  
 29 長洲石頑張、璐路玉父纂『張氏医通』。  
 30 金壇王肯堂宇泰甫輯『幼科証治準繩集』寛文13年。  
 31 『棒心本方』。「文政七年八月廿九日栗原一貫源茂樹献上」と墨書き。  
 32 宇田川玄随『和蘭翻譯内科撰要』。  
 33 『三因方』。  
 34 「胡氏方案」。  
 35 眉山蘇軾子瞻撰、伊藤善韻撰『蘇沈内翰良方』安永6年。  
 36 金谿龔延賢編『魯府禁方』。  
 37 『傷寒緒論』。  
 38 橋春暉『傷寒外伝』。  
 39 李時中増補、管樞編輯、施文举校正『保赤全書』周日校刊行。  
 40 王宇泰訂正『東垣十書』。  
 41 『増補本草備要』。  
 42 『本草類方』。  
 43 『儒門事親撮要図』。  
 44 『東垣先生此事難知』。  
 45 新安呉勉学師古校、応天徐、鎔春沂閱『黄帝素問靈樞経』。  
 46 『医学啓蒙彙編』。  
 47 『重広補注黄帝内経素問』。  
 48 長洲石頑張、璐路玉父纂述『医通』。  
 49 松岡玄達成章『食療正要』明和6年。  
 50 松岡玄達成章『用薬須知後編』宝暦9年刊。  
 51 松岡玄達成章『用薬須知統編』安永5年刊。  
 52 松岡玄達成章『用薬須知』享保11年刊。

- 53「万安方」。
- 54金谿龔延賢編、古燕劉応泰校正『新刊魯府禁方』。  
「文政八年六月五日献上栗原一貫」と墨書き。
- 55後藤佐一述「病因考」。「文政八年六月五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 56通隱先生『重刻軒岐救正論』。
- 57『医学彙函』。
- 58横山惟明研珉『孫真人養生書』文化年間。
- 59小野蘭山『本草啓蒙名疏』。
- 60歙邑葉棐、鮑倚、婿胡一貫、姪晨校刊『図解本草蒙筌』。
- 61『本事方』。
- 62黒川道祐編『本朝医考』寛文3年序。
- 63田村玄仙兼詮撰『勸学治体』寛政4年刊。「文政八年六月五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 64玉函涅斯 雅谷歩 伍乙志『西洋医事集成宝函』1741年序。
- 65大医院吏金谿雲林龔延賢方編『寿世保元』。
- 66香川修庵『重訂肘後百一考』延享3年刊、宝暦7年重訂。「医生員処子臣平田開唐珉繕襲」と墨書き。
- 67臨川陳自明 良甫編『新刊婦人良方補遺大全』。ただし三・四巻は写本。
- 68橘親頭、細川桃庵、望月三英、丹波正伯校正『増広太平惠民和剂局方』。
- 69久城春台「粗医学進歩抄」寛文年間。「文政八年六月五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 70横地正務玄常編『医学的』延享2年刊。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 71臨川陳自明 良甫編「新刊婦人良方補遺大全」。
- 72雷井先生校『診家要記』。
- 73『刻痘科鍵』望月三英跋、享保15年。
- 74竹中通庵『黄帝内經素問要語意翼』元禄15年序、元文5年刊。
- 75北山寿庵道修輯『北山友松子医案』延享2年刊。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 76仁宇允科纂輯『眼科審視瑤函』。
- 77『肺痿肺癰咳嗽上気病脉証治』。
- 78金壇王肯堂輯、新安閔承詔校『瘍医準繩』。
- 79陳志刊、危亦林編『世医得効方』。
- 80安倍真貞、出雲宿祢広貞等撰、木村孔恭校訂『大同類聚方』安永2年。「文政七年八月廿九日栗原一貫源茂樹献上」と墨書き。
- 81虎林台右孫志宏克容氏編『新刊簡明医殻』。
- 82出雲藩特聘医学教授美濃館良臣礼夫述、雲藩医学修定「黄帝内經抄略八十一章」本衛蔵版。
- 83『医林類証集要』。
- 84金壇王肯堂輯、門人新安閔承詔校『女科証治準繩』。
- 85英□圓甫爾互著、吉雄伯元甫訳『内外要方初編』文政3年刊。「文政八年六月五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 86天羽友仙『二神伝』寛政10年刊。「文政八年六月五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 87丹波雅忠著、多紀櫟窓校『医略抄』寛政7年序。「文政七年八月廿九日栗原一貫源茂樹献上」と墨書き。
- 88新安生生子孫文垣手輯『赤水玄珠』。
- 89石洲石頑張 璐路玉爰纂述『医通』。
- 90丹岳野必太千里父著、男浩元浩甫閔『本朝食鑑』。
- 91周南岐来著、城章陽秋校『其慎集』享保21年。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 92劉松峯先生輯著『松峯説疫』。
- 93『本草衍義』。
- 94『傷寒論』享和元年刊。
- 95宋燕山宝漢卿輯著『瘡瘍經驗』。
- 96独嘯庵『微瘡口訣』天明8年序。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 97岡田道珉校正「黄帝八十一難經」寛政3年写。「文政八年六月五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 98廬国秦越人撰、宋王惟一撰、呂広丁徳用 楊玄操 虞庶 楊康侯註解『難經集註』文化元年刊。
- 99太医院正文会稽庠生玄台子馬蒔仲化註解『黄帝内經靈樞註証發微』。
- 100海鹽馮兆楚瞻甫纂輯『馮氏錦囊秘痘疹全集』。
- 101『劉河間三書』。
- 102小野蘭山口授『本草綱目啓蒙』享和3年刊。
- 103宋朝奉郎守太常少卿充秘閣校理林億等校正『千金方』万治2年刊。
- 104横路正務玄常編『医学的』。
- 105宋朝奉郎守太常少卿充秘閣校理林億等校正『千金翼方』。
- 106橋本徳伯寿『断毒論』文化6年刊。
- 107『難病証治類方』。
- 108『準繩』。
- 109玉函涅拵我爾徳児著、宇田川玄随訳『西説内科撰要』文化5年刊。「文政八年六月初五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。
- 110『医学源流』。
- 111『聚珍版顛顛經』寛政12年、「文政七年八月廿九日栗原一貫源茂樹献上」と墨書き。
- 112『古今医統大全』。
- 113『医統正脉』。
- 114『重訂唐王寿先生外台秘要方』。

115山陰陳士鐸經之甫号遠公又号朱華子『傷寒弁証

録』。

116池田錦橋『痘疹戒草』。

117搏天民輯『蒼生司命』。

118宋燕山竇漢卿輯著『瘡瘍經驗全書』。

119延陵吳有性又可甫『瘟疫論類編』。

120『金匱論註』。

120錢塘倪純宇先生選集『本草彙言』。

121『医林類証集要』。

122『医宗金鑑』。

123『医宗秘髓』。

124『本草類方』。

125余杭陶節庵先生『傷寒全生集』。

126『傷寒緒論』。

127張宗良留仙氏『喉科指掌』。

128『瘍科選粹』。

129『外科正宗』。

130大医院使載元礼述『秘伝証治要訣』。

131西晋王叔和『新刻医学脈訣』。

132漢張仲景『金匱心典』。

133『医学要則』。

134『外台秘要』。

135天都普明子程国彭鍾齡『医学心悟』。

136『金匱要略方論本義』。

137『救濟瑣言』。

138『医学啓蒙彙編』。

139『医経原旨』。

140『重刻軒岐救正論』。

141金壇王肯堂輯『傷寒証治準繩』。

142金壇王肯堂輯『瘍科証治準繩』。

143仁存孫『治病活法秘方』。

144『永類鈴方』。

145仲景述『註解傷寒論』。

146陳志刊行、危亦林編集『外科精要』。

147角洲加古『吐方撮要』文化5年識。「文政八年六月五日献上栗原一貫源茂樹」と墨書き。

148竹田昭慶宗俊撰『延寿類要』寛政5年刊。「文政七年八月廿九日栗原一貫源茂樹献上」と墨書き。

149「活人事証薬方」。

150丹波元簡廉夫輯『観聚方要補』。

151陳志刊行、危亦林編集『得効方』。

152杉本良督刊『聖濟總録』文化11年序。

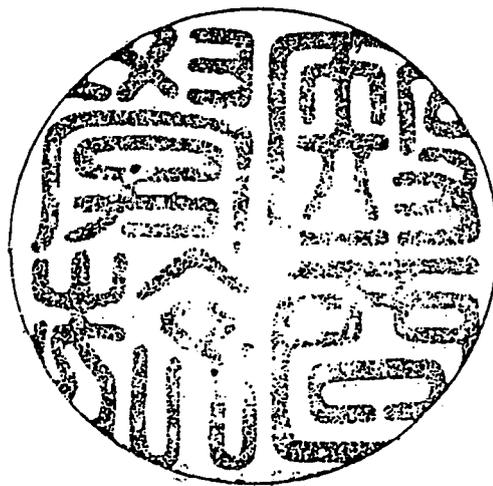
153『丹溪心法附余』。

154『新刻仁斎直指附遺方論』。

155若狭杉田玄白訳『解体新書』。

(小計 155部)

(16) 医学校



(朱)

(English Grammarより採取)

#### 【日赤附属図書館】

- 1 「□己蘭書」「静観書屋蔵」と墨書き。
- 2 Thomas Templeman van der Hoeven, *Verhandeling over Percussie en Auscultatie*. Amsterdam, 1849.
- 3 J.C.J.Kempees, *Beginnselen der Gijferkunst*. 1865.
- 4 *Schei Kunde*, 1859. [ボンペの自筆 (写本)]
- 5 *Oogheel□ Unde*, 1861. [ボンペの自筆 (写本)]
- 6 *Physionogie 2*. [ボンペの自筆 (写本)]

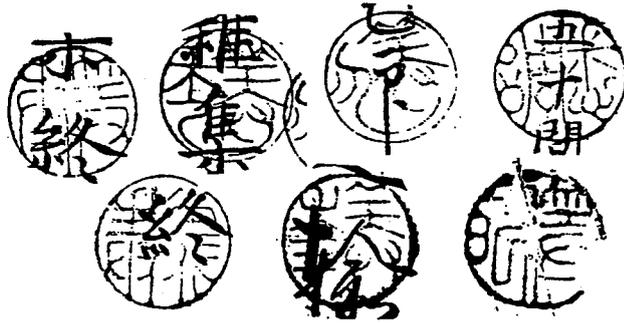
(小計 6部)

#### 4. 今回の調査で判明したこと

16種の蔵書印のうち、「松江図書」印は私立教育会や松江図書館の蔵書印の可能性が考えられ、「松江藩修道館文庫」蔵書印として入れるべきかどうか判断に迷った。しかし、私立教育会には「島根県私立教育会事務所証」印、松江図書館には「松江図書館」「松江図書」印(朱白文)があることや、「松江図書」印が捺された書籍の内容から幕末・維新期に藩校へ納入されたものと考え、「松江藩修道館文庫」のひとつと判断した。

その他、算術書「句股雑集」「□述後編」「送輸」<sup>(49)</sup>に捺してあった7種の印影や、*Spraakkunst*や『和蘭文典後編』<sup>(50)</sup>に捺してあった2種の割印は、不明な点が多かったため、今回は除外した。だが、これらも書籍内容から考えると、藩校修道館で利用されたものと考えられる。

さて、修道館閉鎖時に所蔵されていた国書428部、漢書209部、史子百家書411部、訳書632部、英書102



(すべて黒印)



(いずれも朱印)

8部、仏書821部、蘭書87部には所蔵部局を示す蔵書印が捺されていたと思われるが、今回の調査では和書・訳書・医書351部、蘭書43部、仏書26部、英書2部しか発見できなかった。これは和書・訳書で20.8%、原書で3.6%、全体でわずか11.6%ほどであった。

ここで、蔵書印が単独で捺されたものと重複して捺されたものを図に表すと、次のようになる。

この図をみると、藩校内における書籍の移動等は

あったはずであるが、修道館が閉鎖する明治5(1872)年以前において、捺された蔵書印は2つまでで、3つ以上捺されたものは存在しない。

なかでも「松江藩医籍之記」印を捺した漢医学校存濟館は、開設当時から蔵書印を所有していた。そして、人命をあずかる藩医子弟に特殊な内容と医術を授けたため、蔵書印の重複はまったくなかった。つまり、藩校とは一線を画しており、明治3(1870)年に漢医学校存濟館が閉鎖した後、その医書が修道館に移動された可能性はなかったことになる。

一方、医学校になると、「医学校」印と「雲藩図書」印の重複がみられ、医者子弟が医学と同時に洋学も修学可能になったことを示している。そのため、医学から洋学へ転向する者も現れ、例えば、存濟館で本草学を学んだ松原新之助は<sup>(52)</sup>、明治4(1871)年3月に「皇漢学為修業」を願い出て上京し、翌月には洋学へ転向した<sup>(53)</sup>。そして明治11(1878)年には『植物名称一斑』を著しており<sup>(54)</sup>、彼は医者でありながら高い漢字と洋学の素養をもっていたのである。

つまり、修道館閉鎖時に所蔵されていた3616部には存濟館の医書は含まれていなかったことになり、それらを除外すると、今回の調査でわかった「松江藩修道館文庫」はわずか7.4%ほどである。また、「松江藩図書記」印と「雲州蔵書」印が1部ずつ、「軍用方」印(黒・朱)と「軍用局」印が3部ずつ

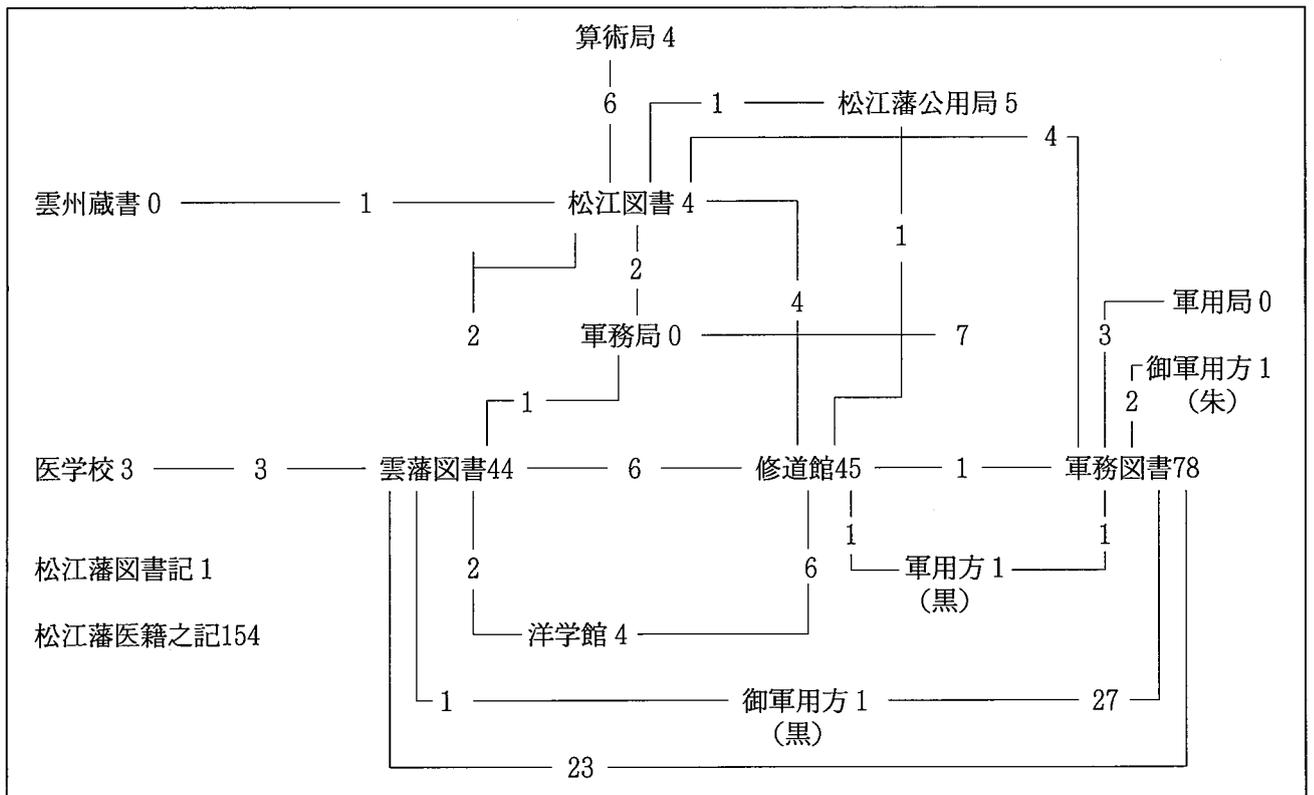


図 蔵書印の重複からみた関係図<sup>(51)</sup>

(蔵書印横の数字は単独で捺された部数、実線の間にある数字は両者の印が捺された部数を示す。)

にしか捺されなかったということもあり得ない。

こうしてみると、残り約93%の「松江藩修道館文庫」はどこか他の場所に所蔵されているはずである。

修道館閉校当時の「和漢洋ノ書籍」は「県官庫」へ、そして明治6(1873)年から「縦覧所」へ移動され、明治11(1878)年からは「中学校ノ新築ヲ待チ該校内へ博物室或ハ書籍縦覧所等更ニ設置ノ見込ヲ以テ先ツ之レヲ廃」<sup>(65)</sup>されたが、結果的に見ると、そのあと「松江藩修道館文庫」は大量に散逸したことになる。

## 5. 藩校修道館の機能について

今回整理した目録は「松江藩修道館文庫」の1割にも満たない書籍だったわけだが、その傾向は藩校修道館の知の全貌に相通じるものと考え、その機能について、2つほど疑問点を挙げ、それについて若干の考察を加えてみたい。

### (1) 修道館以前の藩校蔵書印がない理由

漢医学校存濟館の教授であった山本家の家蔵印らしいものは見あたらなかったが、漢医学校存濟館の蔵書印「松江藩医籍之記」は存在していた。

ところが、藩校として胎動した文明館、明教館、さらに文武館の蔵書印が捺された書籍は1冊も見つからず、そこで儒学教育を行った桃氏や雨森氏の個人蔵印が捺された書籍は存在した。その後の修道館の蔵書印は存在し、その儒者であった内村氏や海野氏の個人蔵印も存在した。

では、なぜ修道館以前には藩校独自の蔵書印がなかったのだろうか。

「もと蔵書乏しく、内庫に蓄ふる所僅に宋学の書数部あるのみであったが、源蔵聘せられてより、毎歳鉅費を以て書籍を京都に求め、数歳ならず蔵書室に大部珍書が集まった」<sup>(66)</sup>。その後、安永7(1778)年には「朝日丹波銭一千緡を寄附付し、之を以て書籍を購入し、九月には文庫を改造」<sup>(67)</sup>しており、藩校文明館、明教館には漢籍や国書が多数所蔵されていたはずである。

ところが、刊行年が古い書籍の多くは「軍務図書」印が捺されており、儒官桃源蔵(白鹿)が集めたとは思われない。その他蔵書印が捺されているのは訳書や原書などが多く含まれており、8代藩主齊貴の時代以降の納入された書籍と考えられる。

このように藩校文明館、明教館、そして文武館の書籍がまったく見つからないのは、藩校文明館がもとも桃源蔵(白鹿)の私塾から移行したものであり、それまでの藩校教育が藩主や世子、さらには一部の家老などの上級武士を対象にしたものであっ

た<sup>(68)</sup>ためである。桃は自らの学識を認められたため儒官として登用され、以後は「家業人」として藩主に御進講しなければならなかった。そのため、桃家では自分で書籍を収集したり、東都や京阪に師を求め、そこへ従学しては新しい学識を吸収していかねばならなかったのである。

桃家や原田家の家蔵本は未見だが、修道館時代の儒者であった雨森精翁(謙三郎)には「雨森文庫」として216部1011冊<sup>(59)</sup>、内村友輔(鱸香)には「鱸香文庫」として713部5995冊<sup>(60)</sup>、広瀬・母里藩藩学教授海野一族の蔵書は「海野文庫」として漢籍133部691冊、国書156部310冊、小冊子類その他42部60冊、合計331部1061冊<sup>(61)</sup>といった大量の書籍がそれぞれの図書館に寄贈されている。これらにはそれぞれの個人蔵印が捺されており、彼ら自身が熱心に学んだ跡を知ることができるとともに、彼らが門人に口授した跡も伺い知ることができる。

つまり、松江藩校文明館、明教館、文武館では、儒官から「内証ゴト」<sup>(62)</sup>として文学や教えを授かる「因循姑息」<sup>(63)</sup>な場として長く存在したのである。

桃西河と千家俊信の交流以来次第に盛んになってきた国学をみると、その関係書は『校注職原抄校本』『神代正語』『古語拾遺句解』『新論』『皇典文彙』『日本書記通証』など、いずれも明治3(1870)年12月9日の修道館学則改正による教科書類であり、専門的な書籍は儒学同様非常に乏しい。明治2(1869)年から修道館において皇漢学の合一が図られ、千家の没後門人中村守手が登用されたが、これもまた儒学同様、中村の学識と蔵書、さらには大社国造家蔵書<sup>(64)</sup>を使って教授されたと考えられる。

ここで「修道館蔵」印が捺されている蔵書をみると、明治3(1870)年12月9日制定の「修道館学則表」にみられる『職原抄』『大統歌』『元明史略』『十八史略』『神代正語』『古語拾遺』『新論』『皇典文彙』や、明治4(1871)年5月制定の「教導所学則」にみられる『西洋事情』、明治5(1872)年5月4日制定の「修道館学則表」にみられる『文章軌範』『福恵全書』『日本書記』などが存在する。しかし、学則表に示された教科書類がすべて揃えてあるわけでもない。とくに『標注職原抄校本』の100冊は、『職原鈔校訂』の24冊、『十八史略』の7冊、『増補元明史略』と『増補和解西洋事情』の各4冊に比べて格段に多い。『標注職原抄校本』『職原鈔校訂』には多くの助教の名前が上書きされており、修道館少助教や仮郷校引受が在松中にそれを修道館講堂で学び、十郡の郷校へ出かけてはそれを講義をしていたことが推測される。郷校で学ぶ階層が医者や庄屋の子弟であったため<sup>(65)</sup>、彼らは明治4(1871)年5月に制定さ

れた「教導所學則」ではなく、明治3(1870)年12月9日の「修道館學則」の「二級素続上等」程度を講義していた。

明治4(1871)年に開校した「大原郡仮郷校」へ入門した26人が「門人」として報告されたり、神門郡塩冶村高勝寺の郷校の「入門式」で入門進物として「束修扇子二本」を差し出せたりしているように<sup>(66)</sup>、その体質は依然私塾的なもので、なかなか改善されなかったのである。

慶応元(1865)年、文武館を修道館と改称し、同時に「修道館蔵」印を作り、藩校で所蔵する書籍類にそれを捺し、それらを松江藩共有のものと考えて藩士に自由に閲覧させた。これによって、藩士は望みによりだれでも自由に、儒者からではなく書籍から学ぶことができるようになったわけであるが、国学や郷校で上述のような状況がその後も続いている実態をみると、この改革が儒学の立場からではなく、後述するような洋学や軍事からの要求であったことが推測される。

これまで「家業人」によって「秘法」として伝授されていた「定位」「随毛術」<sup>(67)</sup>といった算術が、「算術局」で教授されるようになったのも、同じ頃であったと推測される。

(2) 「軍務図書」印が単独で捺された書籍は78部で、「修道館蔵」印や「雲藩図書」印の単独で捺された書籍の45部、44部に比べて多い。そして、「軍務図書」、「軍用局」、「御軍用方」(黒・朱)、「軍用方」(黒)、「軍務局」を合わせると軍事関係書籍の合計は150部になり、重複を含め「修道館蔵」印が捺された64部、同じく「雲藩図書」印が捺された82部に比べても断然多い。それら6種の軍事関係の蔵書印が、どの部局で、いつごろから使用されたものかについては不明であるが、藩校修道館が儒学だけでなく、医学や軍事や算術や洋学を含み込んだ総合大学として充実し、とくに軍事面の強化を課題としていたことを伺わせる。

では、なぜそれまで儒学教育を行ってきた藩校で軍事の強化を行わねばならなかったのだろうか。

松江藩が軍事に力を入れた理由は、江戸にいた金森建策が嘉永2(1849)年以後蘭学御用として藩邸へ出入りしたり<sup>(67)</sup>、嘉永6(1853)年10月には藩主定安へ対し「百幾山新識ノ蘭書」が「世ニ宝ト唱ル者多シト雖、書籍ニ過キタル宝ハナシ」と紹介し、蘭学が「兵学砲術天文星学地学測量医法爾它百家工芸」にいたる「諸芸諸術ノ母」であると上申した<sup>(68)</sup>ことがきっかけであった。金森の影響を受けた文武館助教桃文之助は、文久2(1862)年7月に「改政論贅

言一」「贅言愚存之大意一」、翌月「贅言二」を提出し、「三面海ニ瀕し且隠岐を御預」かる松江藩は、「隠岐或浦辺江夷舶到来」の可能性を有しており、「近年追々戦争ニ相習比中々以水戦ニ長世のみニハ無之候中ニも魯西亜杯ハ別而陸戦ニ長し多る由右ニ付而者歐羅巴洲中之都ヨリ次第ニ呑食して蝦夷之千島辺迄も取込」<sup>(69)</sup>む危機が迫っていることを述べた。そして、その対応として「諸役所御殿合ニ小費を惜」まず、「大船大砲」の造営や「軍法御改革」を実施し、洋学所を開設することを提案した。そうすれば、「近来追々西洋流之医術盛ニ行ハ連」「段々窮理を致し実以有用之事も有」るなかで、「蘭法蘭法と相唱」える「野巫医」が「人命を誤」ることや、「西洋法ハ役ニ立ぬ」という噂を立てることもなくなり、「洋学所出来医術迄も彼此を参考して良法」になる<sup>(70)</sup>と述べた。

つまり、桃文之助はこれまでの儒学教育による理念主義から实用主義へ脱皮するために、洋学所を核として「日本第一之強国」をめざす<sup>(71)</sup>ことを提言したのである。

とくに、金森が教えた下曾根信之<sup>(72)</sup>の過ちを例に引きながら、「翻訳書位を御目当ニ被成且伝聞等を以事を御起し被成候得者決而大なる誤を引出し可申事」と警告し、「彼ハ彼之法を以戦候事故彼之戦法を悉一承知」していることが「知彼知己百戦不殆」ことであり<sup>(73)</sup>、そのために原書による西洋兵法・医学の教授を勧めたのである。

桃はこの時、通訳を通しての教授が能率の点において決して優れていないことに気づいていたのである。

修道館文庫所蔵の原書をみると蘭書が他よりわずかに多く、また「松江図書」「雲藩図書」「修道館」「雲州洋学館之印章」印が捺された『蘭和辞書』『和蘭文典』『和蘭字彙』*Grammatica of Nederdtsch Spraakkunst Maatscch Appij*が見えるのは、金森の存在や当時の洋学の趨勢が和蘭流であった<sup>(74)</sup>ことによるものだろう。

この結果、同年閏8月、藩主定安は執政朝日千助に汽船購入を命じ、続く9月には軍学者佐藤彦次郎が高島流砲術を学ぶために江戸講武所砲術師範役江川太郎左衛門組大鳥圭介へ入門した。彼が江戸で写した書籍こそ、「軍務図書」印が捺された多くの写本であったと推測される。10月になると長崎で一番・二番八雲丸を購入し、翌3(1863)年2月には島根郡大井沖にその姿を見せた<sup>(75)</sup>。そして、同年5月には御供方会の講書が経書から兵書に切り替えられ<sup>(76)</sup>、10月にはとうとう松江藩に洋学所が設置され、間宮観一と布野雲平が洋学指南となったのである。

松江藩では間宮と布野兩名の仲介で<sup>(77)</sup>横浜と大坂にあるハルトリーから7部、これまでも医学書の購入で世話になっていた江戸の萬屋兵四郎から1部の原書が高値で取り寄せ、藩校文武館、そして修道館へ納められた。これが「藩校修道館文庫」の原書である。

しかし、江戸洋学指南であった布野雲平が帰国の際に藩主斎貴から受け取った長持3棹分の西洋書<sup>(78)</sup>がこの原書類に混在しているかどうか、また入江文郎がマルセイユから発送した6箱分の書籍<sup>(79)</sup>の1冊が「MISSION MILITAIRE DE FRANCE AU JAPON」の印が捺された *Cours Complet D'etudes a L'usage des Ecoles Regimentaires du Deuxieme Degre Infanterie et Cavalerie Pour Repondre* (Paris.1863) であるかどうかについては不明である。また英書の輸入が福沢諭吉が持ち帰った文久2年<sup>(80)</sup>以後であることから考えて、洋学所開設当時、英学担当の布野はどんな内容を教授していたか、大量の英書が散逸した現在では推測すら難しい。存在する原書はイギリスよりアメリカのそれが多いことから、英語を教わった藩士の関心は、やはり「ペリリ」の「亜米利加」<sup>(81)</sup>の様子を知ることであったと推測される。

修道館閉鎖当時、訳書の約2倍の原書を所蔵していたことは、松江藩が少費を惜まず、大胆な予算処置をしていたことをうかがわせる。

こうして明治初年には松江藩の野戦砲隊は幕府に次ぐとまで評され、<sup>(82)</sup>桃の言う「真実之武備」<sup>(83)</sup>は着実に実行されていたのである。

明治2(1869)年正月からは『西洋事情前編』『同次編』『同分編』『経済幼学』『瀛環志略』『新条約書』といった西洋翻訳書の買い上げが認可され<sup>(84)</sup>、弘化期から慶応期にかけて刊行された訳書が購入され、「松江図書」「雲藩図書」「修道館」「軍務図書」「松江藩公用局」「松江医籍之記」の蔵書印が捺された。特に『西洋事情』『西洋事情外篇』『増補和解西洋事情』『西洋事情次編』『亞墨利加国条約並税則全』『英吉利国条約並税則全』『阿蘭陀国条約並税則全』『仏蘭西国条約並税則全』『魯西亞国条約並税則全』『瀛環志略』などの版本は多くの藩士に読まれ、「万国之形勢」が理解できるようになった<sup>(85)</sup>。

そこで、明治2(1869)年9月、松江藩ではこれまで「習兵軍営船艦兵器粮廩馬ノ六部」を管轄していた軍事局を軍事局と陸軍に分け、支藩母里藩では「番頭職」を「銃士隊長」、「徒頭者頭等」を「銃卒隊長」「准卒隊長」、「小人」を「歩卒」に改め、10月には支藩広瀬藩でも「従前ノ制度ヲ一変」する藩政改革を行った<sup>(86)</sup>。

ところが、「現今西洋諸国ノ兵法ハ皆拿破崙ニ拠ル」<sup>(87)</sup>ことを知り、今度は仏書を学び始め、明治3(1870)年4月には、静岡藩から招聘したワレットによって、松江藩の兵制は仏式へと変わっていった。

彼こそ個人蔵書印「FIC VALETTE」、を所有した人物であり、慶応3(1867)年1月13日に初来日したフランス軍事顧問団で砲兵差図役下役を担当していた Valette, Frédéric であった可能性が高い。彼は1834年3月11日生まれで<sup>(88)</sup>、松江へ来た時は2度目の来日であり、36歳であった。

彼の蔵書には84、341、441、573という番号と蔵書印とサインがあり、彼が大量の書物を持参したことが推測できる。松江藩士は彼からフランス式の実地訓練を直接学ぶとともに、彼の蔵書を拝借して読み漁っていたと思われる。現存するワレットの蔵書は、彼が帰国する際に生徒であった藩士へ記念として贈ったものにちがいない。



(黒)

(Atlas van xl Platen, Behoorende Bij de Handleiding tot de Kennis van den Vesyngbouwより採取)

こうして、蘭式からいったん英式に変えた松江藩兵制は、同年閏10月に「兵制ハ御趣意ニ基キ一旦従前英式ノ隊ヲ解キ更ニ仏式ニ改メ伝習」<sup>(89)</sup>することが決まった。

この英式から仏式への兵制改革の背景には入江文郎の存在がある。当時の陸軍総裁松平縫殿頭(乗謨)は入江の教え子であり<sup>(90)</sup>、フランス軍事顧問団の文書を翻訳したり、フランス公使レオン・ロッシュと接触し、通訳したのは、当時開成所教授職並であった入江文郎であったと推測される。したがって、わが国へのフランス陸軍導入の意向は、入江が松江藩へ伝えたものと考えられる。

このように、文久3(1863)年の洋学所の開校を機に藩士はまず原書を手にし、明治2(1869)年から翻訳書を読むようになったため、多くの洋学志願者が増えていったのである。

明治3(1870)年以降に外国へ留学した庄司金太郎(仏)、小田均一郎(英・仏)、飯塚納(仏)、岡田好成、井川訥郎(香港)のうち、小田が5年、飯塚が

8年という長期の留学であったことは<sup>(91)</sup>、松江藩が入江からの情報などから、その後も積極的に洋学を導入しようと計画していたことを示すものである。

## 6. まとめ

徳川家康は自己の教養や学問的知識を実際の政治に利用するために学者を身邊に置いたが<sup>(92)</sup>、その考えは松江藩における藩校の開設にもつながっていた。藩主、世子、藩士個人にとっての学習の場であった藩校という1つの教育の機関は、ペリーの来航を機会に政策的転換を行い、学習することを個人的範疇から藩や県の地域共同体の目標に転換し、その達成のために藩校修道館が重要な推進役として、儒学教育から行政局としての機能を持つようになったのである。

この直接の背景は、文久2(1862)年に藩校の重要なブレーンであった桃文之助が、藩政における洋学撰取と軍制改革と人材登用という抜本的な上申を行ったことがあげられる。人材登用についてみると、桃の「天下非常之節ハ非常之才を用る」<sup>(93)</sup> ことを受け、早速、酒屋本郷屋義八の弟内村友輔の採用を決め、元治元(1864)年5月には彼が民間人としては初めて藩校儒官のポストに就いた<sup>(94)</sup>。そして、明治3(1871)年9月には「庶人ヨリ官途ニ挙クル時ハ妻子扶助トシテ米六石ヲ給スル」<sup>(95)</sup> とし、翌4(1872)年5月には「教導所學則」と「女學則」を制定し、藩校修道館が率先して人材登用を行ったのである。

そのため、桃の上申以来藩校では学則の制定・改正がたびたび行われ、修道館になると積極的に書籍を購入し、藩や県の共有財産として備えられていったのである。

こうして藩校修道館は、庶民を含めた教育機関の頂点であり、かつ総合大学としての機能をもつと同時に、藩の行政改革を推し進める中心的役割を果たすまでに機能を拡大させ、これまでの閉鎖性から脱却したのである。それまで藩校に付随していた「藩校修道館文庫」も公共性を兼備するようになったのである。

明治6(1873)年に開設した「縦覧所」のデスクに洋学を学んだ少壮教授陣が陣取り、「取締幹事等臨席各自ノ質問ヲモ弁明致」<sup>(96)</sup> オレフアレンス・サービスを行ったのは、翻訳書を読み、洋学へ関心を持ち始めた旧藩士や、教導所で『西洋事情』を学んだ郷村の若者に対する配慮であった。同時に、「西洋諸国ノ都府ニハ文庫アリ『ビブリオテーキ』ト言フ日用ノ書籍図画等ヨリ古書珍書ニ至ルマテ万国ノ書皆備リ衆人来リテ随意ニ之ヲ読ム」<sup>(97)</sup> 西洋の図書館を考慮に入れた元藩校ブレーンの発想であったと思

われる。

そういう点で「縦覧所」は、機能が拡大・複合しつつある行政局修道館から蔵書機能のみを離し、単独に開設したものであり、公共図書館として機能を持っていたのである。

## 註

- (1) 『長澤規矩也著作集第七巻』 pp. 365~374、昭和62年
- (2) 『内閣文庫蔵書印譜』中の水野忠邦「引馬文庫」の例、昭和44年
- (3) 名倉英三郎「十和田市立新渡戸記念館収蔵図書調査報告和装本書名一覧」『東京女子大学比較文化研究所紀要第50巻』1988年。名倉氏よりご教示、ご提供いただいた。
- (4) 前掲書『長澤規矩也著作集』 p.376
- (5) 上掲書 p.365、同「蔵書印調査の必要性について」『内閣文庫蔵書印譜』所収、p. 5。
- (6) 同上
- (7) 管見すると、前掲の引用文献のほかに横尾卯之助輯、男勇之助、三村竹清補『蔵書印譜』大正3年、小野 則秋『日本蔵書印考』昭和18年、平野喜久代編『蔵書印集成』1974年、丸山季夫『静嘉堂文庫蔵書印譜』昭和57年、『国文学研究資料館特別展示図録第14回特別展示蔵書印展』昭和59年、朝倉治彦解説『国立国会図書館蔵書印譜』1985年。近年出版が行われている「日本書誌学大系」には、林正憲『近世名家蔵書印譜』昭和57年、三村清三郎『三村竹清集一』昭和57年、中野三敏『近代蔵書印譜初編~三編』昭和59年~平成元年、渡辺守邦・島原泰雄編『蔵書印提要』昭和60年などがある。
- (8) 前掲書「蔵書印調査の必要性について」 pp.3~6
- (9) 『日本教育史資料二』 pp.460~486、明治36年、文部省。野津静一郎・上野富太郎編『松江市誌』 pp.268~1320、昭和16年
- (10) 「県治要領庶務部明治四年」写原本明治5年9月4日付、島根県庁総務課所蔵
- (11) 「公私要記十四」6月朔日付、島根県立図書館 桃氏寄贈マイクロNo.4
- (12) 前掲書「県治要領庶務部明治四年」
- (13) 前掲書「公私要記十四」6月朔日付
- (14) 前掲書「県治要領庶務部明治四年」
- (15) 前掲書『日本教育史資料二』 pp.460~486
- (16) 『文部省第五年報』 p.271、昭和41年復刻
- (17) 『文部省第六年報』 p.218、昭和41年復刻
- (18) 前掲書『文部省第五年報』 p.514
- (19) 藤岡大拙「松江書籍縦覧所について」『島根地

- 方史論攷』p.122、昭和62年
- (20) 前掲書『蔵書印集成巻一』p.20
- (21) 前掲書『国立国会図書館蔵書印譜』p.42
- (22) 前掲書『蔵書印提要』p.151
- (23) 松平直亮『贈従三位松平定安公傳』昭和9年。松江郷土館春の特別展「雲州松江地図と絵図」(平成8年6月1日～6月30日)に「松江藩主代々譲印」「松平不昧公印譜」「松江藩主代々黒印」が展示され、初代直政から10代定安までの藩主が用いた印譜がみられた。
- (24) 前掲書『三村竹清集一』p.122、同『長澤規矩也著作集第七巻』p.341。
- (25) 上掲書p.431～432、前掲書『静嘉堂文庫蔵書印譜』p.59。
- (26) 上掲書p.391、前掲書『国文学研究資料館特別展示図録』p.17、上掲書『静嘉堂文庫蔵書印譜』p.101。
- (27) 前掲書『国文学研究資料館特別展示図録』p.30、森鷗外記念会編『鷗外印譜』昭和63年。
- (28) 前掲書『蔵書印提要』p.262
- (29) 前掲書『近代蔵書印譜二編』ページなし、上掲書『蔵書印提要』p.7。
- (30) 『近代蔵書印譜三編』ページなし
- (31) 上掲書p.2、前掲書『国立国会図書館蔵書印譜』p.237、同『近代蔵書印譜初編』ページなし、同『蔵書印提要』pp.15～16。
- (32) 前掲書『近代蔵書印譜三編』ページなし
- (33) 前掲書『蔵書印提要』p.59
- (34) 拙稿「全国地方教育史学会通信第50号」、平成2年10月30日
- (35) 『文部省第二年報』p.238、pp.451～461、昭和41年復刻
- (36) 島根県立図書館、日赤附属図書館、島根大学附属図書館、久保田孝氏所蔵、藤岡太助氏所蔵
- (37) 島根大学附属図書館所蔵
- (38) 松江北高等学校所蔵
- (39) 松江北高等学校、出雲市立図書館所蔵
- (40) 松江北高等学校所蔵
- (41)(42) 日赤附属図書館所蔵
- (43) 島根県立図書館、日赤附属図書館、出雲市立図書館、島根大学附属図書館、久保田孝氏所蔵
- (44) 島根大学附属図書館、島根県立図書館および桃氏寄贈マイクロ、松江市立雑賀小学校、日赤附属図書館、出雲市立図書館、久保田孝氏、藤岡太助氏所蔵、前掲書『蔵書印集成巻二-4』、前掲書『蔵書印譜』p.19、前掲書『国立国会図書館蔵書印譜』p.96。
- (45)(46)(47)(48) 島根大学附属図書館、島根県立図書館、日赤附属図書館所蔵
- (49) 久保田孝、藤岡太助氏所蔵
- (50) いずれも日赤附属図書館所蔵
- (51) 目録により作成
- (52) 佐野正己『松江藩学芸史の研究』p.323、昭和56年
- (53) 「日誌皇漢学校」明治4年3月8日付、5月24日付、島根県立図書館桃氏寄贈マイクロNo.5
- (54) 日赤附属図書館所蔵
- (55) 前掲書『文部省第六年報』p.218
- (56) 前掲書『松江市誌』p.377
- (57) 上掲書p.372
- (58) 石川謙『日本学校史の研究』pp.319～372、昭和52年
- (59) 「雨森文庫目録」島根県立図書館
- (60) 「寄託図書目録鱸香文庫」島根県立図書館
- (61) 「海野文庫図書目録」島根大学附属図書館
- (62) 荻生徂徠「政談」、吉川幸次郎・丸山真男・西田太一郎・辻達也校注『日本思想大系36』p.439、1973年
- (63) 「贅言二」文久2年8月、島根県立図書館桃家寄贈マイクロNo.9
- (64) 「千家国造館書籍目録」千家和比古氏よりご提供いただいた。
- (65)(66) 拙稿「近代学校成立過程において在村医が果たした役割について」pp.44～46、『全国地方教育史学会紀要第15号』所収、1994年
- (67) 「定位秘法及随毛術誓約」写、久保田愛之承寄贈、松江市立雑賀小学校所蔵
- (68) 桃裕行『松江藩と洋学の研究』p.5、1989年
- (69) 上掲書pp.121～2
- (70) 上掲書「贅言二」文久2年8月
- (71) 「改政論贅言一」文久2年7月、島根県立図書館桃家寄贈マイクロNo.9
- (72) 前掲書「贅言二」
- (73) 前掲書『松江藩と洋学の研究』pp.121～2
- (74) 『福翁自伝』pp.33～34、昭和29年
- (75) 前掲書『松江市誌』pp.543～545
- (76) 前掲書『日本学校史の研究』p.344
- (77) *Verklaarde Vragen over de Veldverschansing, den Vestingbouw en den Aanval en Verdediging van Vestingen, Voor Jonge Officieren* に「間宮観一、布野雲平於江戸洋学指南被申付候」との書付けあり。
- (78) 前掲書『松江市誌』p.534
- (79) 前掲書『松江藩と洋学の研究』p.10
- (80) 前掲書『福翁自伝』p.123
- (81) 上掲書p.33、p.58

- 82 前掲書『松江市誌』pp.543～545
- 83 前掲書「贅言二」
- 8485 「明治二年己巳正月ヨリ二月マテ日記」正月10日付、島根県立図書館桃氏寄贈マイクロNo.5
- 86 島根県編『新修島根県史資料篇近代』pp.65～90、昭和41年
- 87 福澤諭吉『西洋事情初編』卷之一、慶応2年、島根県立図書館所蔵
- 88 前掲書『お雇い外国人⑥軍事』p.134、篠原宏『陸軍創設史 — フランス軍事顧問団の影』pp.128～9、1983年。
- 89 前掲書『新修島根県史資料篇近代』p.95
- 90 前掲書『陸軍創設史 — フランス軍事顧問団の影』P137
- 91 前掲書『日本教育史資料二』p.464
- 92 尾藤正英「徳川家康の文教政策と国家構想」p.103、『江戸時代とはなにか — 日本史上の近世と近代 —』所収、1995年
- 93 前掲書「贅言一」
- 94 「公私要記四」6月25日付、島根県立図書館所蔵桃氏寄贈マイクロNo.3
- 95 前掲書『新修島根県史資料篇近代』p.96
- 96 『島根県近代教育史第3巻』51号資料
- 97 前掲書『西洋事情初編』卷之二

#### 参考文献

高畑常信編『遊印鑑賞大字典』1992年  
蓑毛政雄編『篆書印譜大字典』昭和63年

付記：

本稿を執筆するにあたって、県内の図書館、公民館、小学校などたくさんの関係諸機関でお世話になりました。とりわけ、島根県立図書館、島根大学附属図書館、日赤附属図書館、出雲市立図書館、松江北高等学校図書館へは頻繁に訪問したにもかかわらず、快く蔵書を閲覧させていただきました。

また、蔵書印解読には島根大学教育学部福田哲之先生と松江市和多見町永江印祥堂の協力を得ました。さらに、私のノートから書名をパソコンで打ち込んでくれたのは、島根大学教育学部社会科教育の学部および大学院の諸君でした。

一方、本稿について、名倉英三郎先生（元東京女子大学）、竹下喜久男先生（仏教大学）、関山邦宏先生（和洋女子大学）、山中浩之先生（大谷女子大学）からたくさんのご教示をいただきました。

この紙面を借りて皆様に深く感謝申し上げます。

なお、これらの目録はこのあとフロッピーで各図書館へ寄贈しますので、読者の皆様の研究の一助にさせていただきたいと思っております。

（かじたに みつひろ・社会科）